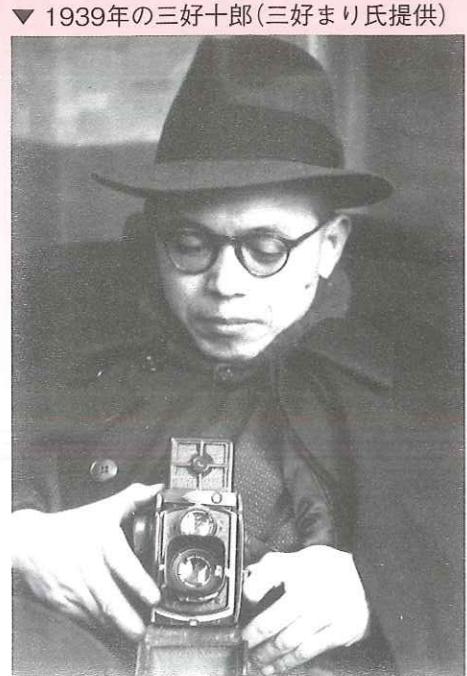


*写真は本復刻版に収録されていません

▼ 初めての戯曲「首を切るのは誰だ」(原本第9巻)



▼ 1939年の三好十郎(三好まり氏提供)

場所、或る地方の祭禮内、会葬室。
時代、現代。
人相、小僧教員…………… 銀
小僧教員…………… 恵
小僧教員…………… 恵
周 振 壓…………… 高
縣 振 壓…………… 小
學 師 生 王…………… 小
內務部長…………… 清
縣 知 事…………… 本
小學校生徒…………… 山田
之 父…………… 山田時兵衛(四十五次)
鶴禪學 が聞いて暫くしてから、依頃とそれには驚いて頭を
傾げて来る。二人とも非常に古リロコートを着
てゐる。店は入つて来るなり、國旗を前に向いてお辞儀を
する。鶴禪學もそれに釣りこまれてお辞儀をする。
鶴禪學 や、原田さん。
原田 あんた、どうしてお辞儀をひどる？
鶴禪學 え？ お詫び？
原田 あなたが、どうりですつたりいけませんよ。見なさい。誰も
おまえが、（觀音席を指す）誰も知らないのにベコベコする
のは、どうりもんさすかな？
鶴禪學 あ、いや、左様々々。誰も知らない。ハハハ。つい舞
ぐな。ハハハ。それに、此處へやつて来たのも大金もうり
前の事でしほ。なるほど、相変わらず此處は立派ですなあ。
原田 (三十代) 水(四十次)
内務部長 夜に心配な事はない。
縣 知 事 ほら、駒込さん、鶴禪さん、何を之間には
いたつります？ え？
小學校生徒 いさ、次番人々。どうもね、ハハハ。
校長 駒込学 おはようござりません冬一いつかりなさい。そん
な後悔せぬままで、ハハハ。
校長 いさ、次番人々。どうもね、ハハハ。
鶴禪學 おはようござりません冬一いつかりなさい。そん
な後悔せぬままで、ハハハ。
原田 いいか、廢はそれで、普羅の兩
者を此處へ来んにいたれど悪い。本職教員の大業行のために
来ておまえをすすむ。ボンヤリしてはなりません。
校長 (急に上げる) 废様々々。私ちがい事では心痛しく
心ழしくは、……どうも二れ、布衣依頼ば……
原田 どうです。舞底しなぎなづないがちわかりません。

▼ 大学生時代の書簡(原本第62巻)

大正十二年七月。早稻田大学文学部英文学科の学生であった三好十郎へ、ノオトヒ、眞体信報を利通し、東海道を九州まで歩いて、その道中から手紙を東京を発出した。以下は、その道中から手紙をで、十一通は学説の対策案書に印刷局裏蓋達信者署名にて書かれ、すべて門とだけ記され差出住所はない。

(1) 沈井康紀
大正12.7.20 東京市外下戸塚五二〇 塔藏学舎

暮次六月、七月二十日 三好生。

あれから神奈川へ電車で来て直ぐ歩き出しました。途中は並木が多くて、蟻が鳴いてゐます。人通りは少しもありません。暑くて怠けいりなめで道の傍の草の上に寝転なつて、昼寝でもしやうと思つてひっくりかへったらアソブ

同室に私の外に二人。一人は山形の監獄都監を大に出てして茴香の根から大体へ行くと言ふ若い男だ。若狭好義、若狭好義、ないが、若狭です。一人は萩原延ら風俗屋さん。山形にある間中商品物の風鈴を売えてゐる轟さんです。いひさのあと、のみで三時間足らずしあがれませんでした。藤沢は昨日、今日夏祭りです。よっぽらつた爺さんなどお町をウロウロしてゐます。それから又たつて行きまく。

轟寄つて蟻がまほしく、
△△△

100

- | | |
|------|--|
| 一九〇二 | 佐賀県佐賀市に生まれる |
| 一九二〇 | 早稲田大学予科に入学 |
| 一九二二 | 早稲田大学予科を卒業、早稲田大学文学部英文科に入学 |
| 一九二四 | Y M C A 機関誌『開拓者』4月号に詩「窓 (Fantasia)」発表。三好の
処女作とみられる |
| 一九二五 | 早稲田大学を卒業。卒業論文はウイリアム・ブレイク
卒業と同時に坪井操と結婚 |
| 一九二六 | 同人誌『銅鑼』に参加 |
| 一九二八 | 詩誌『アクシオン』創刊 |
| 一九二九 | 『左翼芸術』創刊号に、初めての戯曲「首を切るのは誰だ」を発表
『戦旗』に戯曲「疵だらけのお秋」を発表 |
| 一九三〇 | 「首を切るのは誰だ」を村山知義演出で左翼劇場が初演
「疵だらけのお秋」「報国七生院」を隆松秋彦演出で新築地劇団が初演 |
| 一九三一 | 「炭塵 (ガス)」を佐々木隆丸演出で左翼劇場が初演
「おまつり」を隆松秋彦演出で新築地劇団が初演 |
| 一九三二 | 「恐山トンネル」を西郷謙二演出で左翼劇場が初演 |
| 一九三三 | 「人形劇」「口先ばかりでは駄目だ」を左翼劇場が初演 |
| 一九三四 | 「プロット」に戯曲「小さい同志」を発表
『改造』に戯曲「熊手隊」を発表 |
| 一九三五 | 『犯罪科学』に戯曲「恐るべき夜盗・木野金八」を発表
『週刊朝日』に童話「浩ちゃんの町の二日」を連載（2月まで3回） |
| 一九三六 | 『中央公論』に戯曲「せき」を発表
『文化』創刊号に「バルザックに就いての第一のノート」を発表
『文學界』に「第二のノート・打ち碎かるる人」を発表 |
| 一九三七 | 妻の操が死去 |
| 一九三八 | 『斬られの仙太』(ナウカ社)刊行 |
| 一九三九 | 『斬られの仙太』を佐々木孝丸演出で左翼劇場改め中央劇場が初演
『早稲田文學』に戯曲「字・西の田」を発表 |
| 一九四〇 | 『新潮』に戯曲「妻恋行」を発表 |
| 一九四一 | 『早稲田文學』に戯曲「焼酎」を発表 |
| 一九四二 | 『妻恋行』を八田元夫演出で新築地劇団が初演 |
| 一九四三 | 寺島さく江と再婚 |
| 一九四四 | 『麵麴』に操の追悼詩「水尾」を発表 |
| 一九四五 | 俳優丸山定夫の紹介でPCL（東宝撮影所の前身）とシナリオ契約を結ぶ |
| 一九四六 | 『幽霊莊』を伊藤基彦演出で創作座が初演 |
| 一九四七 | 『文学案内』に戯曲「逃げる神様」を発表 |
| 一九四八 | 『中央公論』に戯曲「屠殺場へ行く路」を発表 |
| 一九四九 | 『逃げる神様』を千田是也演出で新築地劇団が初演 |
| 一九五〇 | 『彦六大大に笑う』を杉本良吉演出で井上正夫演劇道場が初演 |
| 一九五一 | 『噛みついだ娘』を村山知義演出で前進座が初演 |
| 一九五二 | 『屠殺場へ行く路』を東京舞台が初演 |

国家権力とは、そもそも何物なのだろうか。その結論を先に言つてしまふと、こういうことになる。「国家権力とは——あらゆるイデオロギーが集大成されたものである」と。そして、この結論を分かれ易く具体化させようとするときに、三好十郎の存在がクローズ・アップされてくる。

私がイデオロギーの毒をはじめて知つたのは、西脇順三郎著『古代文学序説—幻影の人』（昭23）によるものであった。

その著によれば、宗教という姿で、最初のイデオロギーが人間社会に出現したとき、それ以前と以後とでは、人間社会に決定的な変化が生み出された。それ以前は、自然の中で、人間をはじめ全生物は共存共栄していたが、それ以後は弱肉強食の社会になつた。

イデオロギーが出現する以前の人間社会のことを、西脇は「幻影の人」と呼び、文学作品の底流に、この「幻影の人」が在るか否かを価値基準にした。

第二次世界大戦の時期に、カミュは「イデオロギーは人を殺す」と明言した（『自由の証人』（昭27））。そして、三好十郎はカミュの訴えに共感して、『自由の証人へのノート カミュの政治参与』（昭27）を出した。

当時の三好十郎は、戯曲「胎内」（昭24）で、戦争と人命、生存の意味を問い合わせ、小説「肌の匂い」（同年）で、生命の根元を性に求め、全生物の性こそが人間の原初的にして根源的なものであることを明らかにし、西脇の言う「幻影の人」を底流にもつ作品を発表していた。

国家権力とは、そもそも何物なのだろうか。その結論を先に言ってしまうと、こういうことになる。「国家権力とは——あらゆるイデオギーが集大成されたものである」と。そして、この結論を分かち易く具体化させようとするときに、三好十郎の存在がクローズ・アップされてくる。

私が三好十郎の存在を知ったのは、丁度、この時期である。三好十郎は、どのようなプロセスを経て、「幻影の人」に到達することが出来たのか。このことを追及するのが、イデオロギーに冒されていた私自身の内的たたかいに、この上なき核になると思つた。

私は、敗戦直後からの自己との対話から、イデオロギーに冒され、まるで「生きた屍」になつてゐるもう一人の自己に気付いた。これ

三好十郎は、國家権力を支えているのは、ヒューマニストや宗教家たちの、イデオロギーに冒されている人たちであることを未完の戯曲「神という殺人者」で訴えようとしたが、それは遺稿となつた「悪人を求む」（死後三日後に『読売新聞』に掲載）に結晶した。彼の言う「悪人」とは、全てのイデオロギーを拒否する人のことで、これこそ、三好

木戸 恭一（しげひと きょういち）――三月書房
一九二一年 京都生まれ
一九四七年 慶應義塾大学経済学部卒業
一九五〇年 三月書房開店

主著に、

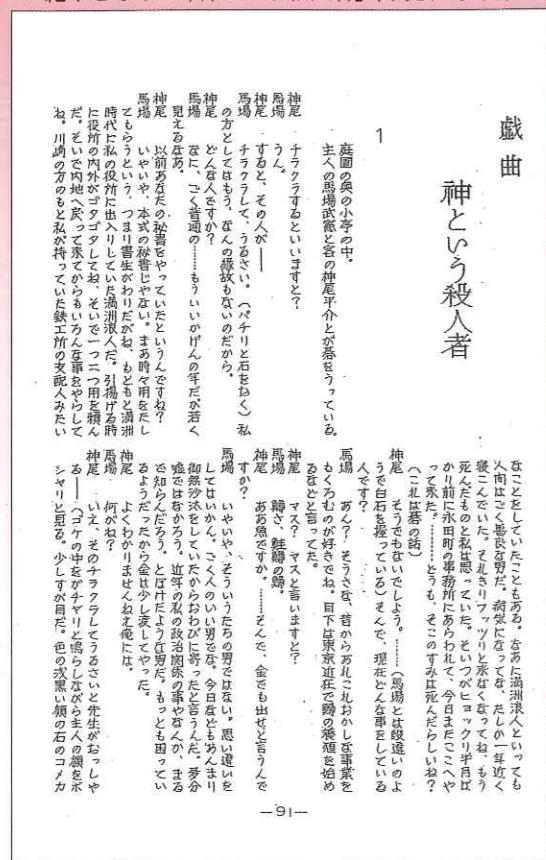
『現代史の視点——〈進歩的〉知識人論』（深夜叢書社、初版一九六四年・
増補版一九八二年）

『三好十郎との対話——自己史の追及』（深夜叢書社、一九八三年）

— 内 容 見 本 —

※写真は本復刻版に収録されていません

▼ 絶筆となった「神という殺人者」(未完、原本第1巻)



-91-

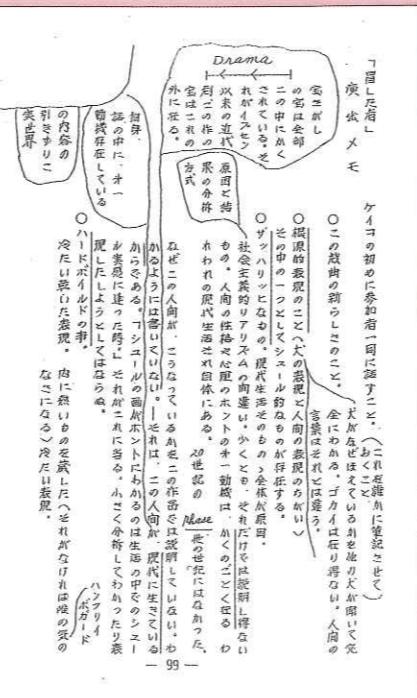
戯曲

神といふ殺人者

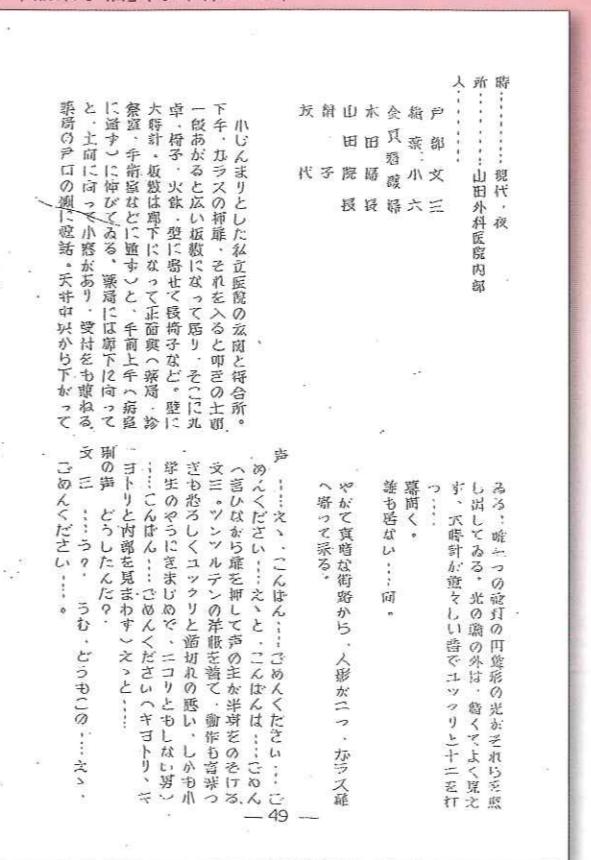


▼ 晩年の三好十郎
(白木茂氏撮影、三好まり氏提供)

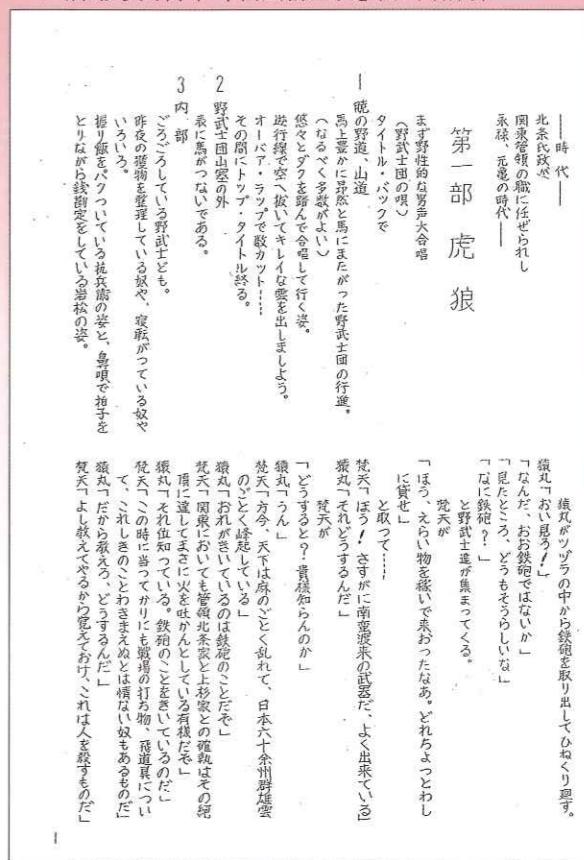
▼ 「冒した者」演出メモ(原本第30巻)



▼ 「稻葉小僧」(原本第31巻)



▼ 活動写真台本「戦国群盗伝」(原本附録)



一九三七 長女まり誕生。名付け親は丸山定夫

「地熱」を杉本良吉演出で井上演劇場が初演
「戦国群盗伝」が滝沢英輔監督で映画化される

「裏わられた町」を佐々木孝丸演出で前進座が初演

「寒駅」を米山彌演出で五月座が初演

「路地の奥」を八田元夫演出で前進座が初演

「新潮」に戯曲「鏡」を発表

東宝(P.C.I.)ほか3社が合併し改名)を退社

「彦六なぐらる」を佐々木孝丸演出で井上演劇場が初演

「浮標(ブイ)」を八田元夫演出で新築地劇団が初演

「鷺の王峠」脱稿

「好日」を脱稿(未発表)

「俺は愛する」を脱稿

「鷺の王峠」が伊藤大輔監督で映画化される

「鷺の王峠」を前進座が初演

「文化維新」に戯曲「おさの音」を発表

「三日間」「寒駅」を佐佐木隆演出で文化座が初演

「俺は愛する」「おさの音」「獅子」を佐佐木隆演出で新国劇が初演

「戯曲二日間」「夢たち」(桜井書店)刊行

「日本演劇」に戯曲「おりき」を発表

「おりき」を佐佐木隆演出で文化座が初演

「峯の雪」清書完成

「崖」をN.H.K.が初の長時間ラジオドラマとして放送

「鷺の王峠」を三好十郎演出で新国劇が初演

「文化維新」に戯曲「崖」を佐佐木隆演出で文化座が初演

「戯曲研究会」を始める(翌年秋まで続く)

「崖」をN.H.K.が初の長時間ラジオドラマとして放送

「鷺の王峠」が伊藤大輔監督で映画化される

「戯曲研究会」を始める(翌年秋まで続く)

「戯曲研究会」を始める(翌年秋まで

復刻版巻数	原本巻数	内容	発行年月日
第7巻	32	をさの音／俺は愛する／「俺は愛する」創作ノート	1963（昭和38）年6月21日
	33	樹氷（上）／「樹氷」舞台劇化のためのノート①	1963（昭和38）年8月20日
	34	樹氷（下）／「樹氷」舞台劇化のためのノート②	1963（昭和38）年9月28日
	35	（＊新聞・雑誌等所収）作者より／「ツーロン港」と「喋る」／ソフィスト列伝／丸山定夫についての断片／劇作家のくらし／新劇の悪口 他（計24点）	1963（昭和38）年10月23日
	36	逃げる神様／嗜みついた娘／寒駅／マツコとユミコ	1963（昭和38）年11月27日
	37	夢たち／夜の道づれ	1964（昭和39）年1月16日
第8巻	38	廃墟／橋の下	1964（昭和39）年1月31日
	39	大インテリ作家／小説製造業者諸氏／「日本製」ニヒリズム／ブルジョア気質の左翼作家／落伍者の弁／或る対話／恐ろしい陥没／ぼろ市の散歩者 他（計11点）	1964（昭和39）年3月20日
	40	炭塵／「炭塵」に添へて	1964（昭和39）年※月日不明
	41	天狗党余燐 襲はれた町／鶴の王峠	1964（昭和39）年4月28日
	42	その人を知らず／「鏡」のためのノート／「寒駅」のためのノート	1964（昭和39）年5月31日
第9巻	43	地熱／獅子	1964（昭和39）年6月30日
	44	（＊新聞・雑誌等所収）真実はある／映画・感覚／女流作家（上）（下）／東西文学者比較研究／催眠小説の流行／日本より／小説の衰弱 他（計20点）	1964（昭和39）年7月31日
	45	殺意（ストリップショウ）／痴情	1964（昭和39）年8月31日
	46	愚者の楽園／夕閑語	1964（昭和39）年9月30日
	47	美しい人（上）	1964（昭和39）年10月31日
	48	美しい人（中）	1964（昭和39）年11月30日
	49	美しい人（下）	1964（昭和39）年12月31日
第10巻	50	三日間／劇場の真実／「三日間」のための覚え書	1965（昭和40）年1月31日
	51	（＊新聞・雑誌等所収）文学に於ける政治／逆コースの恐怖／ひとの命わが命／平凡すぐれた詩／歩くこと／カミユの政治参与／抵抗のよりどころ 他（計19点）	1965（昭和40）年2月28日
	52	バイロン伝	1965（昭和40）年3月31日
	53	トミイのスカートからミシンがとびだした話／魔の石／「魔の石」ノート	1965（昭和40）年4月30日
	54	肌の匂い／補遺・詩四篇	1965（昭和40）年6月30日
第11巻	55	（＊新聞・雑誌等所収）「火炎ビン」始末／抵抗の姿勢／打ち砕かれた心／清水幾太郎さんへの手紙／アメリカ人に問う／平和というバベルの塔 他（計12点）	1965（昭和40）年7月31日
	56	やまびこ／猿の図／ごくつぶし	1965（昭和40）年8月31日
	57	（＊新聞・雑誌等所収）腰ぬけインテリ／T君からの手紙／T君への返事／退屈している作家／口舌の徒／くいちがい／徒労／人間の二つの型 他（計28点）	1965（昭和40）年11月16日
	58	生涯からのノート（第一）（第二）／戯曲のつくり方	1965（昭和40）年12月22日
	59	（＊新聞・雑誌等所収）判断保留のこと／二人の狂人／急進派の病気／若い世代に失望／ほめるらん／思いきった手紙／退屈の話／悪人を求む 他（計41点）	1966（昭和41）年1月30日
第12巻	60	評論隨筆補遺（1）（2） 戯曲座のために／押川昌一君のこと／この作品を觀よ／演劇断想／不良心／談話 秋元さんの事 他（計50点）	1966（昭和41）年3月31日
	61	ノート 1・2	1966（昭和41）年5月17日
	62	（＊書簡）1～164	1966（昭和41）年7月2日
	63	（＊書簡）165～557／補遺	1966（昭和41）年9月30日
	附録	活動写真台本・戦国群盗伝	1966（昭和41）年10月31日

復刻版巻数	原本巻数	内容	発行年月日
第1巻	1	峯の雪／「峯の雪」に関するノート／小説 神という殺人者／戯曲 神という殺人者／ノート 神と人の間一神という殺人者／創作ノートについて	1960（昭和35）年11月8日
	2	好日／おりき	1966（昭和41）年3月22日（＊再版）
	3	評論・隨筆篇一（計15点）	1960（昭和35）年11月26日
	4	彦六大いに笑う／彦六なぐらる／彦六の歓び／「彦六のよろこび」に関する「ノート」／決闘	1961（昭和36）年1月21日
	5	せき／字・西の田／焼酎	1961（昭和36）年3月2日
第2巻	6	朝露／捨吉／獣の行方／内の鶯／「朝露」の出演者に	1961（昭和36）年4月5日
	7	天狗外伝・斬られの仙太／「好日」補筆のための覚え書／「廃墟」第二部のための覚え書	1961（昭和36）年5月17日
	8	賭ける女／横町の消息	1961（昭和36）年6月15日
	9	首を切るのは誰だ／疵だらけのお秋／おまつり／唸れ口ボツト	1961（昭和36）年7月11日
	10	じぶんの顔／生活から／文体／寝ざめぎわ／二三のくふう／十年二十年のこと／宗教について／原始と近代／戯曲座にて／行き倒れ 他（計26点）	1961（昭和36）年8月19日
第3巻	11	傾斜／危険な演技／鍾乳洞／一夜	1961（昭和36）年9月30日
	12	無明一番槍／「無明一番槍」に就て／露路の奥／青春	1961（昭和36）年10月30日
	13	報国七生院／横に！そしてタテに／熊手隊／童話 花と卵	1961（昭和36）年11月25日
	14	詩劇 水仙と木魚／大福と予言者／夜の饗宴／やかましい人／オペレッタ 大福と予言者／「夜の饗宴」についての覚え書	1961（昭和36）年12月23日
	15	（＊詩）雨夜三曲／一番外側のもの／今私の友は／空と涙と／怠けた放浪者／賽の河原／月かけを埋葬す／味噌買いに行く／旅行をする精神 他（計48点）	1962（昭和37）年1月31日
第4巻	16	（＊雑誌・パンフレット所収）新劇と映画／作家渡世／新劇の弱さ／新劇を強めるために／商業劇団のレパートリー／ラジオの演目／愉快いから 他（計23点）	1962（昭和37）年2月27日
	17	彦六大いに笑ふ／地熱／おスミの持参金	1962（昭和37）年3月31日
	18	炎の人／ゴオホの三本の柱／人生画家ゴッホ／炎の人（作品集より）ゴッホとのめぐりあい	1962（昭和37）年4月30日
	19	大きい車輪／女ごころ／妙な女／撮影所の幽霊／美しい手紙	1962（昭和37）年5月26日
	20	胎内／戯曲研究会のノートから	1962（昭和37）年6月12日
第5巻	21	妻恋行／屠殺場へ行く路／鏡	1962（昭和37）年7月17日
	22	破れわらじ／不良日記／健の犯罪／夜の潮／願いごと	1962（昭和37）年8月21日
	23	世界最古の書籍／熔接されたもの／「熔接されたもの」解題	1962（昭和37）年9月27日
	24	（＊新聞・雑誌等所収）村山知義へ／芝居隨談／観客との合作／安住の棲家／映画に関しない隨筆／三月の劇評／三面記事的リアリズム／文芸時評 他（計24点）	1962（昭和37）年11月5日
	25	浮標／病中手記	1962（昭和37）年12月6日
第6巻	26	生きてゐる狩野／幽霊荘	1962（昭和37）年12月16日
	27	恐山トンネル／鉄のハンドル	1963（昭和38）年1月31日
	28	ぼたもち／初旅／鈴が通る／ともしび／女体	1963（昭和38）年2月26日
	29	（＊新聞・雑誌等所収）「路地の奥」の作者として／芸術至上主義と能率至上主義／本職のこと／講演ぎらひ／俳優いろいろ／俳優への手紙 他（計16点）	1963（昭和38）年4月5日
	30	冒した者／「冒した者」演出メモ／町はづれ	1963（昭和38）年7月27日
第6巻	31	崖／稻葉小僧／満員列車／「満員電車」「稻葉小僧」上演の手びき	1963（昭和38）年5月15日